

検証「喪失」

—— 社会福祉原論 ——

佐賀枝夏文

はじめに	三
第一章 喪失の基盤研究	四
一 喪失と「社会福祉のしくみ」	四
二 喪失と「家のしくみ」	七
三 喪失と「市場経済のしくみ」	一〇
第二章 検証「喪失体験」	一三
一 中途障害と喪失体験	一三
二 瓜生岩と喪失体験	一九
三 九条武子と喪失体験	二四
四 正岡子規と喪失体験	二九
おわりに	三四

はじめに

ひとにとって生別、死別の「喪失」を体験することは、避けておれないことであり、厳粛な事実でもある。人生の物語りは、ある場合に喪失の体験が中心のテーマとなり、人生を決定することもある。喪失は、自分の意志で「捨てる」ことではなく、他者から奪われることや、自然の摂理のなかで「個人」の意志とは関係なく不本意に失うことである。「社会の渦」「時間の渦」「自然の渦」との関係で起きることであり、個人の事情を越えたできごとである。喪失を俯瞰すれば、渦中にある当事者にとっては「ままならない」「理不尽なできごと」として映り、自然の摂理からすれば自明のことといえるかもしれない。しばしば「人生はままならない」と語られるのは、自分にとって思いどおりにならないからであり、峻厳な「縁起」からすれば、当然の成り行きである。しかし、喪失は人間にとって、解けない「なぞ」であり、人生の「不思議」でもある。

本稿は、二部構成で組み立てることにした。第一部は、喪失について筆者のフィールドである福祉現場と臨床心理現場で考えてきたことに焦点をあてた。取り上げたテーマは、「社会福祉のしくみ」「家のしくみ」「市場経済のしくみ」などをテーマとしたが、精緻さに欠ける点や分析に欠ける恨みが残った。第二部では、喪失を究明する方法論として、喪失を体験した人物の「歴史」を追ってみた。人物を取り上げたものとしては「瓜生岩」「九条武子」「正岡子規」で、無名人としては、臨床場面で出会った中途障害者である。歴史上の人物については、残された作品や事業から推測する作業では、生々しい「こころ模様」が理解できにくいことや生きた時代背景の違いが問題として残った。また、臨床事例からは、生々しい「こころ模様」が描写できたが、こころの変遷を証明でき

にくい恨みが残った。

第一章 喪失の基盤研究

一 喪失と「社会福祉のしくみ」

社会福祉は、その目的とするところを次のように説明できる。天災や人災で何ものかを「失った」人々への社会的な援助システムである。その範囲は、おおむね「福祉六法」に準じて分けてみることができる。生活保護法（公的扶助）、児童福祉法、老人福祉法、精神薄弱者福祉法（知的障害者福祉）、身体障害者福祉法、母子及び寡婦福祉法である。それぞれについて、喪失という観点でみてみると次のようになる。生活保護法の対象者は、健康を喪失し、就労を継続できないひとである。また、経済不況のあおりを受けて職場を喪失した失業者も対象となる。児童福祉法の場合も同様、家庭崩壊で家庭養育を失った子どもたちが児童福祉法の対象となる。また、両親が共働きで保育に欠ける子どもたちが保育所の利用児となる。老人福祉法では、高齢者が熾烈な競争社会のなかで、労働力としての評価が低く、労働の場を失う場合である。また、高齢者は、心身ともに疾病に罹患しやすく健康を喪失した場合が老人医療、老人福祉施設の対象者となる。精神薄弱者福祉法（知的障害者福祉）の場合は、知的障害というハンディのために、人間関係や就労の場を失い同法の対象となる場合である。身体障害者福祉法は、身体に障害を受けたために就労の場を失ったひとを対象とする。母子及び寡婦福祉法は、生別、死別で父（夫）を喪

失した母子に対して行われる福祉サービスのことである。以上現行の社会福祉法のどれをとっても、喪失が起因、誘因となっている。

喪失と社会福祉は、きわめて密接な関係にあるもののひとつである。社会福祉というのは、通常喪失が原因となつて生み出される現象や状況に対しての「対策」や「手当てを立てること」である。しかし、社会福祉の課題は、事の重大さや緊急性などから、「対策」が先行しなければならぬために、施策や制度が強調されすぎる側面がある。社会福祉は、緊急性が高く現状の打破や手当てを急務とする実務であることからすれば、当然のことといえるかもしれない。社会福祉の施策は「政策的」であるという指摘がされるところと重なるところでもある。社会福祉は現状に焦点をあてることが多く、実務的でなければならないために、「量」の問題を対象としているのが現状である。失われた「量」の補填ということに重きが置かれ過ぎである。「何が」という「質」の問題には焦点があてられない恨みが残るところである。明治以降から現在に至る社会福祉は、「量」の問題で終始したといえるであろう。極論すれば、補填すべき、年金や福祉施設など「量」そのものが不足していたということであり、「量」の問題を解決するために現在までできたということである。したがって明治にはじまる近代以降の社会福祉は、喪失に対して「損失補填の対策で応えてきた」と極論できるであろう。失われたものを、補填することが「社会福祉」であると、誰しも疑わずにいたことも事実である。福祉が貧困対策と同一に位置づけられてきた所以である。

喪失した部分の損失補填をおこなうものとして、社会福祉的な「対策」や「手当て」が実施されてきたことは歴史的事実である。喪失によって生まれた諸々の福祉ニーズに対して、それに応える策として福祉のシステムの

数々がつくり出されてきた。戦後は、新憲法にその目的と責任主体を明確に成文化して行われた歴史でもある。憲法の第二十五条の条文に謳われている「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」と生存権の目標と対象を規定している。また、保障にあたっては、「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と保障内容を明確にしている。憲法の条文解釈は、時代や状況に大きく左右されてきたことは周知の事実である。憲法を実現すべく、福祉六法が整備され、さらに福祉六法を実現するために社会福祉事業法が横断的な要件整備のために立法化されてきたといえるであろう。それぞれの福祉六法が制定されてから半世紀を経過して、俯瞰してみる時期が到来しているように思う。社会福祉の法規は、六法のそれぞれに対象を明記し、対象となる要件も明記し、援助のシステムをさらに明記し、合法であれば福祉サービスは誰でも受けることができるとしている。現物給付と金銭給付の詳細についても年度ごとに見直され実施されてきた。

あえて「量」の問題を指摘するならば、わが国の福祉は、何が失われたかではなく、何を補えば良いかという論議に終始しているという見方もある。また、福祉サービスを受けるための要件についていうならば、失われた状態を証明することが必要である。いい換えるならば、失われた状態が続いていなければ、福祉サービスが受けられないシステムとなっている。さらに言葉を加えるならば、福祉サービスを受けるということは、喪失した証明でもある。端的な例は、「身体障害者手帳」の交付のシステムである。成人病や交通事故などで、人生の半ばで障害者となり、手帳の交付を受ける場合、障害が固定した時に交付の要件を満たすことになる。手帳の交付に伴い、減税、年金支給、家屋改築の補助、自助具の支給など数々の福祉サービスを受けることができる。しかし、

現状の福祉サービスと引き替えに「障害者」というラベリングによって、精神的な重荷を背負うことになる。喪失が身体的な喪失であっても、こころの状態は均一に語ることはできない。社会福祉では、喪失を固定したものや数量化しなければならぬところに、限界があるように思う。生活保護費基準にしろ、障害の等級判定にしても数量化や計量化によらなければならない。数量化や計量化するさいは、見えない部分は判定対象となりにくい。「見える福祉の対象」と「見えない福祉の対象」があるとすれば、社会福祉が高度に発展したといわれているが、所詮「見える福祉の対象」の域を越えていないのが現実である。ひとが喪失の体験に出会い、失意の渦中にあることは計量することはできない。計量できにくい体験も、それも福祉の対象であることを主張したい。戦後、新憲法が制定され「福祉」は、すべての人々が平等に享受できる権利とされた。社会福祉の法制化という形で、実現してきた。法制化は社会福祉制度の完備に拍車をかけたが、計量化できない部分を排除してきたように思う。

「計量化」を越えることに、社会福祉が挑戦しない限り、社会福祉制度は税金の分配の役割を担う実体的な体系でしかないだろう。社会福祉学は学際的な領域の学問という認識が消えたわけではない。独自の基礎理論がないという認識を、つねにわれわれはもちつづけなければならないだろう。

二 喪失と「家のしくみ」

封建制社会は、為政者によって恣意的につくられた共同体であった。封建制の典型を村社会にみることができる。封建制のもとで、封じ込められた村社会は、しだいに血縁、地縁を濃厚にしていき村が共同体としての体裁を整

えていった歴史でもある。わが国の封建制社会は、農耕を主とする村落共同体であり、労働力の集約を必要とするために、互助が萌芽しやすい土壌があった。さらに労働力の集約は、大家族を生み出した。家族の構成は、家長が絶対の権威と権力をもち、「家」の構造と意識を形成していった。封建体制は為政者と家臣、村長と農民、家長と家之子というように上下の関係で封じ込めて構築された。「家」を形成した要素として、さらに儒教思想が影響したものであると考えられている。「家」は、わが国の統治の末端の構造として、戦後まで温存されてきた。封建制支配体制が幕末に崩壊し、明治維新以降「近代化」のあゆみのなかで、いち早く様変わりの様相を呈したのが都市と農村であった。封建制のもとで人口の流失、流入が封じ込められていたものが、明治維新を境に変貌を遂げている。人口の都市への流入、農村からの人口の流出は、都市化を生み、農村の過疎化をすすめた。もっとも早く「近代化」の兆候として現れたもののひとつである。

明治維新以降も温存されたもののひとつが「家」である。「家」は、家父長制度を中心に、本家分家といった「しきたり」のもとに有形無形の生活規範として深く浸透していた。温存されつづけた背景には、天皇制の末端組織として「家」が秩序維持の役割を果たした。とにかく、戦後まで「家」は温存されていた。そのなごりは高度経済成長期に突入するまで、存在したと考えるべきであろう。「家」が単に残り続けたのか、それに代わるものが見つけられなかったのかという問題があるが、とにかく残った。わが国の家族の六〇％が核家族になり、「家」の意識や構造が崩壊した現在においても、お盆と正月の帰省に「本家分家」の仕来りのなごりをみることができるといえる。

「家」意識や「家」にまつわる機能や伝統が悪しきものであったのか、という是非はさておくとして、一九八〇年後半以降社会はあらゆる面でボーダーレスの状態を呈しはじめた。「家」の機能であった秩序、教育、保育、

養護などの機能を失い、血縁同居という形態を残しながら「家」は崩壊した。「家」の機能は外部化され、学校、保育所、社会福祉施設、医療機関が整備されてきた。かつての機能がことごとく喪失したなかで、秩序もそのひとつである。「家」が存在したときの状態をいうならば、「自由なき秩序社会」のミニマム版であった。地縁、血縁の共同体のなかで自由を奪われ、序列のなかで生きた人々は「礼節を重んじる勤勉なひと」としてつくられた。封建制度のもとでつくられた「生き方のモデル」であったともいえるであろう。一九八〇年まで崩壊せずに存続したのは、不思議なことでもある。近代化されなかった「家」と考えるべきか、近代化されにくい「家」と考えるべきか。封建制度と「家」という考えから脱却すべきなのか、問題が残るところである。

一九八〇年代以降は、家はかつての機能を失い弱体化したといえるだろう。高度に発達した市場経済を背景に都市化、過疎化が進展し、地縁、血縁を軸にした共同体は崩壊して久しい。封建体制下に築きあげられた「自由なき秩序社会」が崩壊し、近代化以降「秩序なき自由競争社会」へ移行したといえるだろう。喪失体験は、「個人」の出来事ではあるが、生活を支える社会の状況も大いに影響するといえる。

喪失の状況を支える基盤が「自由なき秩序社会」であるのか、「秩序なき自由競争社会」であるのかという問題は、喪失と深い関係にある。ちなみに、肉親や、生活基盤の喪失した状況にある時、地縁血縁を基盤とする共同体の支えのなかであるのか、地縁血縁から孤立し、「個人」として生きることを強いられる現代人であるので、明確に違うことを念頭におく必要があるだろう。近年「秩序なき自由競争社会」がすすみ、互助や支えることが希薄となった状況下である。喪失したひとは、戦意や闘争心を失い戦列から遠ざかり、疎外されることになる。生きにくい時代ということに封じ込めていいのか、と問いたくなる。自由競争の戦列から脱落したひとを救済する

制度が社会福祉であるならば、相変わらず、社会福祉は市場経済の「安全弁」であり続けなければならないことになる。

三 喪失と「市場経済のしくみ」

わが国の経済的繁栄の「光と影」は大量生産、大量販売、大量消費という、市場経済のしくみから生まれたといえるだろう。大量生産は商品ひとつあたりの原価を低く押えることで安い商品コストを実現し、市場での競争力をもつことで大量販売を可能にした。その結果として、企業は生産のスケールを拡大し、利益をしだいに上げて巨大な産業資本を築きあげるに至った。それにともなう波及効果は社会全般に有形、無形の影響を与えた。それは労働の形態にはじまり、生活のスタイルやものの見方や考え方にいたるまで、あらゆるところに変化や変容を及ぼしたといえるだろう。これらの経済活動はわが国の国際競争力を高め、生活の豊かさと経済や社会の発展を実現してきたといえるだろう。すでに「貧しい国」「資源を持たない国」というレッテルは返上し、世界屈指の「豊かな国」となった。しかし、この豊かさの代償として失ったものや犠牲となったものを忘れてはいけないう。なかでも社会の動きを敏感にキャッチし、その影響下で犠牲を受けたのは現代人の「こころとからだ」と指摘できるだろう。

現代人の「こころとからだ」は社会や時代の動きに影響を受けやすく、社会や時代を映すカガミであるともいえるだろう。その証として、かつてはみられなかったようなことが現代人の「こころとからだ」に反映している。市場経済は労働形態を大きく変え、それにともない生活形態も大きく変わった。人間関係においても当然のよう

に現われ、ライフスタイルも変貌している。これらの変化が良いものであるか、そうでないかは現時点においては結論は出ないだろうが、問題点を多くはらむことは事実である。

われわれが今生きることは、かつてないほどに困難な状況なのかもしれない。「むかし」にはこころの解放があったというのは、短絡し過ぎであるが、今の時代ほどロマンのもてない時代はないだろう。素朴に思うのは、いつの時代においても「状況」が個人の生き方のスタイルに何らかの影響を与えていたはずであるが、今の時代ほどに社会状況が敏感に反映していることはなかったであろう。

関係のないような市場経済のしくみが、現代人の生き方に、実はきわめて密接な関係がある。市場経済は商品に競争力をもたせることで成り立っている。品質が良いこと、同じ商品と比べて値段が安いことや品質が良いことが、市場での競争を勝ち抜く基本原理となっている。また、市場経済は再生産だけでは成り立たない市場のしくみがあり、拡大し再生産を余儀なくされているところがある。再生産を拡大維持していくことは限りなく巨大化していくことを意味することである。巨大化は経済のあらゆる面に及び、大量消費を生み出す原因ともなっている。わが国はこの巨大化した企業群と大量消費が高度に成熟した段階にきているといえるであろう。

消費を拡大していくことが市場経済のしくみであり、購買意欲をあおった結果、現代人の意識の底流に「ある価値観」ができ上がってしまった。耐久消費財を「もてるもの」と「もてないもの」では、もてるものが幸せであるという、間違った価値観ができ上がってしまった。現代人は誰に操られているのかわからないまま、いつの間にか耐久消費財を購入するために働くという生活のスタイルができあがった。

家族ももっていた相互依存的な関係は希薄となり、家族のメンバーはそれぞれが孤立化している状況が生まれ

ている。家族のメンバーがそれぞれに持っていた役割もすでに、子育ては保育所へ、食事の一部を外食産業へと外部化している状況である。家族が失ったものでもっとも大きいもののひとつに、家族が癒しの機能を失ったことである。家族がここに傷を抱えた場合、父親の父性と母親の母性がここを解放し、癒したはずである。

ある面からは不条理にみえたり、矛盾であることは人間が生きている証のようなもので、なくならないことである。近代化の悪弊がここにあるように思える。近代化は不条理や矛盾を排除してきた歴史的な流れがある。不条理な面や矛盾を影の部分とするならば、影の部分が人間存在の大切な部分である。この影の部分に光りを当てることなく、包むことがここを癒すことである場合がある。

また最も深刻な「ところ」への影響として、市場経済が生み出した物質文明から生まれた価値観を見逃してはいけないうであろう。市場経済が発展するためには優勝劣敗の原理が巧みに働き、「もてるもの」と「もてないもの」では歴然ともてるものが優れていると考えるような価値観がいつの間にか深く浸透してしまっている。また、早いことや大きいことも良いこととされ、遅いことや小さいことが劣っているとする考えが当たり前になってしまった。その背景には自由競争が市場経済のしくみとして、競争原理をすべてに優先し、完全な競争社会をいつの間にかつくり上げてしまったからである。

当然のこととして、競争社会のメンバーとして子どもたちが育てられ、どのような場面においても競争をしいられているのが現状である。競争というのは強者や秀でたものが勝者となり、弱者にはつらい敗者の烙印を押すことがルールとして行われるものである。このなかで、ことに障害をもった子どもたちは競争社会の敗者として、つねにつらい立場におかれることになっている。

市場経済は「競争原理」と「満点主義」が両輪をなし、敗者や障害をもったひとにはつらい社会であるといわざるを得ない。いいかえるならば、「喪失」の渦中にあるひとや「喪失」を背負って生きるひとには過酷な社会であるともいえる。

第二章 検証「喪失体験」

一 中途障害と喪失体験

人生途中での障害との遭遇を考えてみたい。いわゆる壮年期における身体的喪失は、職業や人間関係など有形無形の資産を形成しているだけに、その後の生き方に大きく影響すると考えられる。喪失が「もの」であるのか、「人間関係」であるのかということを対象を明確にしなければならないが、ここでは、社会福祉施設で出会ったひとをモデル化して話を展開してみたい。ひとりの具体的な人物を分析対象とする場合、守秘義務、人権擁護というところからも厳密に守らなければならないことであり、本稿では人物に関しては、モデル化という作業をおしていることを了解して読みすすんでいただきたい。本稿でモデル化した対象は、人生の途中で何らかの疾病で身体障害者（肢体不自由）となったひとである。

(1) 事例の概要

タケ(仮称)さんは、四二歳のとき右脳より出血し、病巣部位の摘出手術を受け、その後遺症で左半身(左上肢、左下肢、体幹左側部)の運動機能が著しく障害され、障害として残ったものである。身体障害手帳二級の手帳交付を受けている。家族歴は、両親はすでに他界し、兄夫婦の家族と同居していた。職歴は、病前までは兄とび職の仕事をしていた。

タケさんの障害の状態は、マヒ側は筋緊張が強く手足は回内状態で機能不全を起こし、多くのADL(日常生活動作)が障害されている。リハビリ後、歩行は杖を使用すれば可能な状態であり、階段の上り下りを除けば、比較的問題のない状態であるといえる状態まで回復していた。タケさんは脳血管障害の好発期の初期に発症したもので、後遺症として左半身のマヒが残ったケースで、CVA(脳血管障害)の形態においても比較的、類似した症例といえるものである。知的な面や社会性は、失われていない状態で、他者との人間関係においても疾病前と変化がない。

(2) 喪失の実態

タケさんが人生の途中で、失ったものをあげると、第一に自分の「からだの機能」をあげることができる。からだの機能喪失を一次喪失とすると、一次喪失でタケさんが体験したものは、動いたはずの手や足が動かないのと、それに付随するしびれや痛みをあげることができる。動かないことだけではなく、半身にはしびれや痛みをとまなう。これらの苦しい体験を一次喪失としておきたい。

第二段階として手や足が動かないことで、病前のとび職の職を失うことになった。このことを一次喪失とは分けて、二次喪失と考えることにしたい。一次喪失と二次喪失の明確な差異は、一次喪失が直接的に失ったものを意味するのに対して、二次喪失は間接的に失ったものを意味するものとして考えたい。一次喪失については因果律からすれば、疾病との関係は体質や病態の誘因や起因としてあるという考え方が成り立つが、二次喪失は喪失のあり方がきわめて「時代や社会」を反映するものであるといえる。

市場経済は、競争原理が巧み社会で、効率や能率が優先される。いうならば非能率的な障害をもったひとが排除されるしくみができ上がっている。タケさんは「時代と社会」のしくみから二次的な喪失を体験することになったと考えることができる。とび職という職業に復帰できなかった理由としては、職能として機敏さや運動性を要求されるとび職に不適であるということである。現代の価値観や労働環境からすると自然なように思われるが、職場のなかにタケさんの居場所を探すことを、誰も努力しなかったことが気にかかる場所である。

さらに第三段階として、タケさんが喪失したものととして、人間関係という第三者からは見えにくい部分ではあるが、重要なところである。二次的に喪失した「職」は、人間関係をも喪失させる結果となった。社会からの認知にあたる部分が、「職」という関わりから生まれるものである。職を失うことで、社会から「無用」という烙印を押されたということになったのだろう。二次的喪失が関与してうまれた三次的喪失としておきたい。からだの一部を喪失し、それが誘因で職を喪失し、さらに人間関係を喪失したことになる。この事例のような、きわめて深刻な喪失の体験は、めずらしい事例ではなく、おおくの「中途障害」の方々が類似した体験の渦中にあることも付言しておかなければならないことである。

（3） タケさんの憂鬱

タケさんが喪失した「からだの機能」については、タケさんの言葉を借りるなら、年中からだのなかに重い鉛が入っているような感じ、ビリビリした痛さがあり、からだを動かすのが怖い感じがあるという表現である。生活動作については何をするのも気が重く、消極的になってしまいうのは、マヒが第一の理由ではあるが、動作に伴う痛みが伏兵となっているようである。タケさんが消極的ながら自発的にからだを動かし、消極的に訓練に参加する理由としては、放置することさらに筋の萎縮がすすみ、障害が重くなるという「脅迫的指導助言」から、不本意ながら参加している。

生きる意欲の根源は、「得る」ことや「上昇」することが目標になっているときに活性化されるといえるであろう。タケさんの憂鬱の理由のひとつとして、からだの機能が改善するよりも、将来低下する状態ということが理由として考えられる。先々の心配が先行し、「今を、生きる」ことが障害されている状態となり、こころ模様が憂鬱となっている状態である。中途障害者のタケさんにとっても、受症前までは自然にできたことができない、挫折感を抱えることになった。とび職という職業がら、運動性や機敏性には人一倍自信があったタケさんが、歩けない、重いものが持てないというのは精神的な敗北を受容しがたい理由ともなったと考えられる。右手だけという制限のなかで、あらたな仕事や訓練へ意欲的には取り組もうとしない理由があったと考えられる。訓練課題には、できることに対しては取り組みが、少し難しい課題に対しては取り組もうとしない姿勢がみられた。その姿からは同じく憂鬱という表現でしか語れないものがあつた。

タケさんが失ったものの中で深刻かつ重いものとしては、仕事人としての自信や仕事を通して築いてきた人間

関係など、無形の財産を一瞬にして失ったことである。人間関係のなかでの「役割」のすべてを剝奪され、役割期待が一瞬にして消失し、無用とされたことの深刻さをカウンセリングの場面で何度も繰り返し語ってくれた。ことに深刻だったのは、兄夫婦と同居しており、病院から訓練センターから帰宅しても居場所がなく、義絶同然となったことである。

タケさんの憂鬱は「からだの機能喪失」「職の喪失」「人間関係、役割の喪失」など、疾病を起因に一次、二次、三次と深刻に喪失が展開したことによる。まさに「こころとからだ」の喪失体験であるといえる。

あえてタケさんの状態を象徴すると、「あきらめ」であった。彼の言葉から出てきたのも、「あきらめ」の表現が多かったように思う。タケさんは、世間の職人としての評価も得、職場や地域社会での人間関係も築いてきたものを、まさに一瞬にして失った。逃げ道のない閉鎖したところ模様を形成せざるを得なかった経過について考えてみたい。

(4) 憂鬱のからくり

ある経過をたどってみると、緊急の治療からはじまった病院生活も終結を迎え、機能回復のリハビリテーションも終え「復帰」といことがみえはじめたときに憂鬱の状態がはじまっている。回顧談で、からだのことを考えると、「むかし」はできたのからはじまって、「むかし」のようにしていたのかなど、過去のなかで生きているような状態であるとも語ってくれた。また、日常生活の動作が「痛み」がともなうことから、動かすことに対して不安がともない、動作が萎縮したとも語っている。

職を失ったことから、生活不安が極度に高くなり、将来の不安から逃げるために、極端に生活について考えないようになった。さらに過去へのこだわりが増幅した理由がここにあるように思う。過去のなかの自分を語るとき、不安定な居場所のない状態から逃げていた。習慣化し、日常の大半を過去を夢想する生活となった。過去と交流しているときにところが軽くなったような体験から、急速に加速がついたとも語っている。タケさんのこの模様は、不安なところを見たくないことから、過去のなかでの生活へこころの安定をもとめ、「今を、生きる」ことから距離ができたといえる。

「過去の良き日」と「将来へのあきらめ」が循環し、こころの閉鎖回路をつくりあげてしまったと考えることができる。こころが閉鎖し外界と交流しない状態のなかで、白日夢を見続けるような生活である。この生活のなかで、「今を、生きる」ことが障害され、憂鬱なところができあがってしまった。

(5) タケさんの投げかけたこと

「抑うつ状態」が表面化し、意欲が減退しはじめたころタケさんに出会い、受症からの葛藤、挫折感、不安を聞くことになった。主訴の前景も背景も、すべてに通じるのは、喪失の体験であった。喪失がまさに「失う」こととでしかなく、すべてが発元し、また結論にいたる循環した閉鎖回路のなかにあったといえる。循環したところに「あきらめ」があり、その渦中で、苦悶していたということである。生まれてきたこと、生きてきたことのすべてが「喪失」したことで意味を失ったタケさん。「今」を生きようとしなない、「明日」を見ようとしなない、「むかし」を懐かしみ、古いアルバムを見続けるタケさん。喪失の段階は、時間の経過の中で一次喪失から三

次喪失まで、拡散している。拡散は最終的に「生きる意欲」までも喪失してしまった。この事例では、喪失の体験が消化されず、「生きる意欲」を枯渇させてしまった。この状態を、われわれは評価する尺度をもたない。再び「生きる意欲」を回復することを期待したい。ここで喚起したいことは、「家」を支えた共同体は崩壊し、「家」そのものが空洞化し実態を失っている。この事例に限っていうならば、時代や社会が少なからず関与している。「家」が崩壊していなければ、タケさんが地域社会のなかで、包摂されたのではないか。このような競争社会でなければ、生きる場所が喪失せずにあつたのではないか、ということが気にかかるところである。

「障害の受容」ということに関しては、この事例からは解答が見られない。受容はされなかったというしかないだろう。ひとりの人間の人生が、障害によって「あきらめ」の境地から脱出できなかった。人生の物語りでいうならば、起承転結の「転の巻き」で障害に遭遇している。「起の巻き」「承の巻き」が順風で、「転の巻き」で転落したというくらいで良いのか少し気にかかるところである。タケさんが「起の巻き」で両親と死別していることが気にかかるところである。

二 瓜生岩と喪失体験

瓜生岩は、明治の慈善事業家を代表するひとりである。著名な業績としては、済生会病院の創設や、わが国の保育事業の草分けである東京養育院の初代幼童掛長をつとめるなどの仕事が残っている。岩の生涯の前半は、平凡な女性としての姿である。三四歳のときを境に非凡ともいえる女性実践家へ転身している。三四歳の「喪失」の体験に着目してみたい。

(1) 実践家「ほとけの岩」誕生のプロローグ

瓜生岩は、文政一二年(一八二九)二月に会津、現在の福島県喜多方市の油商「若狭屋」渡辺利左衛門の長女として生まれた。岩が生まれたころの「若狭屋」は喜多方では名のとった油屋で、山形に支店も開くような商いぶりであった。しかし、岩の平穏な生活は長くはつづかなかった。ひとはそれぞれに生きた時代や社会の影響を受けるのは明らかである。そして、岩も例外ではなかった。五歳のときにはじまった「天保の飢饉」は数年間にわたり大洪水、凶作がつづき大飢饉となり、幕藩体制が危機に瀕しただけでなく庶民の生活に大きな被害を及ぼした。岩が生活した東北地方はこのほか厳しいものであった。凶作つづきで米価が高騰し、多くの餓死者を出し、棄児、間引き、堕胎が常態となるような状況であった。さらに明治元年(一八六八)には会津は戊辰戦争の戦場となり、それはわたしたちの想像をはるかに越える凄惨なものであった。

岩は混乱期の時代を人生の舞台とし、生老病死と出会っている。九歳のとき父利左衛門は急病であつてなく死去し、忌明けの挨拶まわりをしているときに「若狭屋」は焼失してしまう。凶作による不況のさなか「若狭屋」の再興はかなわず、母子は実家に戻される「瓜生」姓は母方のものである。一七歳の春に呉服商の佐瀬茂助のもとに嫁ぎ、一男三女が生まれたが、茂助は七年の長患いのち、死去する。ときに岩は三四歳であった、人生をまるでドラマ化したような、出会いと別れを体験し、それを転機に社会事業に骨身を惜しまなかった。その足跡は「幼学校」「福島教育所」「東京養育院」「産婆研究所」「福島済生会病院」など広く実践活動を展開している。

岩が転身ともいえる、福祉実践への道を選択した理由が気になるところである。死別や生別の悲しみ、家の崩壊を経験し、いつまでも忘れ去ることなく人生を恨んだことだろう。失ったものを追い求める「執着」心を、岩

がどのようにして払いのけて生きたかはさだかではないが、明らかにいえることは人生のできごとをすべて「受容」できたからであろう。わたしたちは岩の身辺に起きたできごとを自分のこととして、そのままを受け止めるには抵抗感があるだろうが、同じ生老病死の世界を生きるものとしての自覚を学ぶことができるだろう。

(2) 骨身を惜しまず

会津若松は、長くつづいた飢饉のあと、追いつきをかけるように戊辰戦争の戦場となった。その悲惨さは子女をも犠牲者とするもので、筆舌に尽くし難いものであった。敗戦後の会津若松は戦災孤児、戦災の罹災者であふれ、なかでも子女たちは路頭に迷うありさまであった。岩は喜多方で近隣の農家に呼びかけ、また、家財のすべてを投じて、夜具や衣類をそろえて救護をはじめた。もと日新館の教官で浅岡源三郎と出会い、放置されたままの子弟教育を思い立つ、これが「幼学校」の設立の経過である。その後「幼学校」は、小学校令が制定され、その役割を終え幕を閉じている。

「幼学校」閉鎖を契機として東京深川の貧民救助の事業「救養会所」を見聞し、救済の方法について学ぶことになる。福島県にも同じものをつくることを思い立ち、再三東京に足を運び、明治三二年（一八八九）に許可を得て「福島教育所」を設立している。設立、運営の資金を捻出のために「持ち株」の組織を考えて、資金繰りをしていくことになる。

この二つの事業は、先輩が敷いたレールがなく、岩自身が未踏の分野をもくもくと開拓していくのである。救済のために、ひたすら骨身を惜しまず精進する姿であるといえるだろう。この岩の姿をだれいともなく「ほと

けの岩」というのは、まさに菩薩が衆生の救済をするのに喩えたものであろう。

わたしたちが目指す生き方として、岩の生きた姿のように骨身を惜しまず実践するものでありたい。岩が開拓した仕事をみたとき、「幼学校」「福島教育所」にしても「持ち株」のことにしても、だれが岩に卓越したアイデアを教えたのであろうかと不思議になる。これらのことは、体裁や名誉を越えた必要性から生まれた慈悲だろう。いま、ここで学びたいことは、骨身を惜しまない実践の大切さである。そこに「自然と道が開かれる」ことを知ってもらいたい。

不安や迷いはそれを解消しようと考えれば、考えるだけ増大するものである。不安や迷いからの唯一の解決の方法は、不安や迷いの原因となるできごとを「ありのままの姿」として受け入れ、なすべきことをなす以外にはない。未知のことに遭遇したとき、不安や迷いを増大させるより、つらくても悲しくとも、なすべきことを実践するしかない。「不惜身命」このことばをこころに刻んで、骨身を惜しまずにことに処していききたい。

（3） 生きとし生けるもの

岩の活躍ぶりが世に広まり、明治二四年（一八九一）から一時期、かの渋沢栄一が関係した「東京養育院」の幼童世話掛長に招聘されたことがある。その岩のしごとぶりを税所敦子が歌に詠んでいる。

瓜生岩子刀自のこころざしをたたへて

たのもしき老木の蔭のなかりせば

こまつも千世は経がたからまし

岩子刀自の育児の業にいそしめるをたたへて

ははきぎの蔭をはなれしなでしも

めぐみの露に生し立らむ

奥寺龍溪著『瓜生岩子全』四恩瓜生会出版部、一九一一年

東京養育院に入所しているほとんどの子どもたちは、その成育歴が原因してか、ここを閉ざしているものが多かったが、岩が着任して子どもたちは快活さを取り戻したといわれている。また、そのうち設立した「産婆研究所」「福島済生会病院」のしごとの広がり、生まれ来る新たな生命への慈悲であり、病院の経営は病に苦しむひとへの慈悲であり、生きとし生けるものへの慈悲のこころである。また、岩の活動を布施に喩えるなら、「財施」だけではなく、恐怖を取りのぞく「無畏施」がそなわったものであることを知っておく必要があるだろう。

わたしたち仏教保育者は子どもたちから慕われ、信頼される存在であることが大切である。けっして怖い存在であってはいけない。子どもたちは未知の世界におそるおそる、歩みだしたばかりである。生まれてきたことが祝福され、喜ばれる存在として自信をもって生きる子どもたちとして育みたいものである。

参考文献

奥村龍溪著『瓜生岩子全』四恩瓜生会出版部、一九一一年

山野光男著『社会保障の先駆者たち』時事通信社、一九七四年

五味百合子編著『社会事業に生きた女性たち』ドメス出版、一九七三年

三 九条武子と喪失体験

九条武子(一八八七―一九二八)は浄土真宗の本願寺派二世大谷光尊(明如上人)の二女として誕生した。幼児期は京都府師範学校付属幼稚園、同尋常高等小学校を卒業したのち、家庭教師に就いて英才教育を受け、高い教養を身につけて成人した。武子二三歳のとき、兄光瑞の室、籌子の弟九条良致と結婚し、同年夫の留学に同伴してインドからイギリスに渡った。ロンドン滞在中に宗教教育にもとづく女子教育や慈善事業などの施設を視察したのち帰国している。このときの見聞と経験は、その後の武子が全身全霊をかけむけた実践活動に大きな影響を与えていたと考えられる。

武子は九条家に嫁ぎ、夫良致の華々しいイギリス留学で新婚時代がはじまり、まさに順風に乗ったかにみえた。しかし良致ひとりがいギリスに残り、武子は翌年帰国し、それ以降は夫の帰りをひたすら待ち続ける日々を過ごすなければならなかった。夫の良致は実に十年の滞英期間を経過した後、武子のもとに戻っている。夫の帰国後、ようやく訪れた平和な家庭生活を東京、築地本願寺で過ごしていた。しかし安泰な生活がはじまったかにみえたが長くは続かなかった。武子は築地本願寺時代の一九二三(大正十二年)に関東大震災に遭遇し、自らも被災し、生活資財のすべてを一瞬にして失ってしまった。

この被災体験をひとつの契機にして武子は、慈善救済事業に身を投じていくことになる。大震災の直後から武子は築地本願寺を救災事務所として、全国本願寺派同朋に呼びかけて「罹災児童愛護袋」を募り、子どもたちの

救援活動をはじめた。これらの活動は「あそか病院」、東京真宗婦人会の事業として設立した「六華園」の創設へと結実している。また、女子教誨、免囚保護事業にも尽力した足跡が残っている。

武子の生涯は十六才にして父光尊と死別し、そして、のちの結婚生活も夫良致のロンドンからの帰国を十年間待ちつづけなければならぬものであった。時代は日露戦争、関東大震災、そして明治から大正へと世相も価値観も目まぐるしく変わる時代であった。そして、人生半ばにして「敗血病」を患い、四十二年の短い生涯を過ごしている。このように武子の生涯は決して安泰なものではなかったが、人生の出会いと別れを体験するなかで、運命に翻弄されることなく、宗教的自覚とでもいえる境地を獲得したといえる生涯であった。そこから生まれた「ことば」や「行動」が結びついて、社会的実践となり慈善事業や教化活動になっている。

付言するまでもなく、武子は歌人として著名であり、『金鈴』『薰染』『白孔雀』『無憂華』や雑誌などに千四百余首が収められている。武子の優れた感性やものの考え方は作歌の過程でより深められ、作風として作品に表現されているが、それは作品だけでなく同時に社会や時代をとらえる鋭い感性としても育まれ、また、信仰者としての生き方に見事に反映している。

(1) 九条武子と関東大震災

関東大震災は伊豆大島の北端千ヶ崎の相模湾底で発生し、地震の「強さ」は震度六、地震の「大きさ」はマグニチュード七・九であった。激震は関東地方を直撃し、大震災が未曾有の災害へと拡大したのは、東京市内一三四ヶ所、郡部四四ヶ所の出火の発生によると考えられている。大震災は日本の経済や社会をも大きく揺さぶり、

未成熟だった資本主義を勢いをつけて軍国主義、金融恐慌時代へと突入させる機動力となった。これを契機に「持てる者」と「持たない者」、資本家と労働者が両極に別れた分岐点でもある。当然のごとく「ひずみ」は生まれ、大震災を契機に金融恐慌のあらしがおきている。

ちなみに明治期にはじまった近代慈善の流れは、慈恵、博愛などの名称のもとに盛んに行われてきたのであるが、このころを境として社会事業へと成長を遂げた。この時代の分岐点に武子が活躍したことも、社会福祉の歴史からみると見逃せない重要事項である。

（2）「喪失体験」と書簡

武子は関東大震災を築地本願寺で被災している。築地本願寺は地震では倒壊は免れたものの、その後の火災で焼失した。大震災は家屋の倒壊と火災が重なり、多くの犠牲者を出した。武子は多くの被災者と共にあてのない彷徨の末、着の身着のままの姿で、命だけは取り止めたという状態であった。

大震災の体験は武子の「何か」を変えた。これは武子の大震災以降の生き方に軌跡が残っている。着目にあたいるのは、武子が大震災の惨状から学んだのは、なくした財産や思い出の品々への未練や執着心を見事に断ち切った、「甦生」の生き方であった。喪失体験は一般的に語ることではないが、悲嘆にはじまり、混乱をくり返しながら、時間を経過するといわれている。あるひとの場合は運命を恨み、人生に落胆し、「ままならない人生」を不本意と思い、生涯を閉じることもある。また、時間の経過の助けを借りて体験を薄めていく場合もある。武子は短期間のうちに、ある結論に達している。「転身」ともいえるような宗教的自覚にいたり、不惜身命ともいえ

る実践家となった。

『書簡』のなかに喪失体験を通して実践家へと変遷する、ここらの軌跡をたどることができる。この喪失体験の受容過程の軌跡は、三通の書簡にみることができる。

関東大震災の当日……一九二三（大正一二）年九月 一日		
第一便……………	同 年	九月 八日
第二便……………	同 年	九月十四日
第三便……………	同 年	九月十七日

第一便は大震災から一週間後、小康を得て無事を知らせる書簡で、文面に武子自身の被災の様子が読み取れる。文中の「……不思議にあたらしい詠草が二冊入れて御座いました。自分はいれたことは覚えないので御座いました。……」と、大震災の当日の動揺した様子が読み取れる。一連の書簡の三篇を比較してみると、第一便のなかには告白のようなものがなく、冷静な文体で、急いで安否を知らせる程度のものである。この冷静な文体の中で、あえて読み取るなら、事態を客観的に、少し距離をおいているようにも読み取ることができる。そうだとすると、物事を客観的にとらえ、衝撃から自らを防衛しようとするとする「ここらのメカニズム」が働いているとも考えられる。

第二便「罹災後ではじめての便り」は文体も先のものとは異なり、心情が素直に叙述されており、ことにつづられ

た文章の中に、武子のところを読み取ることができる。第二便のなかで「……もうあの後、かれこれ十日餘にもなりますのに、夢を見ている様で、暑さも寒さも、時候さへ何が何やらわかりませず、まして行先のことなど、ほんとに暗の様。こんな心ぼそいことは御座いません。三十五年間の物質は、全部焼きつくしましたから、これからは甦生のつもりで、私もよっぽど心を入れかへねばならぬと思うております。……」と武子が、書きつづている。一便、二便は「ショック期」に綴られたものであるとも考えられる。一便では「離人症」的な防衛反応ともいえる「構え」が文体にあったが、二便では「構え」が消えたように思える。反対に生々しい「こころの風景」が描写されている。

長文の第三便の『書簡』で、悲嘆、混乱、苦悶と戦いながら、こころを整えていく過程を読み取ることができる。一便と二便とも趣をことにした三便は、実に長い文章でつづられている。武子が断ち難い執着心から、脱却していく「こころの変遷」が述懐されているように思う。第一便が実にたんと事実と儀礼的な礼状におわっていたのにたいして、第二便は生々しい体験を「寒いやら、暑いやら……」を吐露し、第三便は実に丹念に大震災の様子と心象を描写し、締めくくりに「甦生」のなみなみならない決意が述べられている。この長文は、宛名の小西夫人を相手に武子自身のところをつづったものであると考えることができる。言い換えるならば、武子が白紙の便箋に自在にこころのすべてを語りかけた表現であると考えることができる。つぎることのないこころの動揺を吐露し、述懐したものといえるであろう。

武子にとって、大震災でもっとも衝撃を受けたのは、大東京が火に包まれ、塵芥のごとく失われる人間の生命を目の当たりにしたことであった。「大丈夫」とすがるべきものが物質文明ではなく、すがる世界はただ阿弥陀の

世界であることに気づく契機となった。第三便の結びに「甦生」して生きたいという決意は、物質文明の世界から阿弥陀の世界への開示とも言えるであろう。

参考文献

- 九条武子著『無憂華』実業之日本社、一九二七（昭和 七）年七月八日
中島陽一郎著『関東大震災』雄山閣、一九八二（昭和五七）年七月五日
籠谷真智子著『九条武子』同朋社出版、一九八八（昭和六三）三月十日
佐佐木信綱編『九条武子夫人書簡集』実業之日本社、一九二九（昭和四年）年四月二五日
中山峯太郎著『九条武子夫人』大日本雄弁会講談社、一九三〇年（昭和五）年一月一七日
昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第二八巻所収、「九条武子」一九六八（昭和四三）年

四 正岡子規と喪失体験

子規は、疾患のために硬組織が脆弱化し、浸食破壊される脊椎カリエス（Caries）に罹患し、病状が進行し三三歳で終命している。明治短歌界にきら星のごとくあらわれ、旧来の作風に写実性の新風を吹き込み「和歌改革」の旗手として活躍した歌人である。二九歳で脊椎カリエスの診断をくだされてからも、旺盛な「和歌改革」への情熱は失われることがかった。晩年の病状は、カリエスの進行がすすみ、皮膚は褥瘡のため膿と痛みは尋常ではなかった。その闘病生活が『病状六尺』『仰臥漫録』に残されている。まさに自らの体験をリアルに写真し、失われていく自由、生命を浸食する病を直視したものである。子規の闘病生活は、想像を絶する「喪失」体験であっ

た。子規にとって、急迫した闘病生活を記すことは、どのような思いがあったのであろうか。不思議に文体からは苦渋は匂うことなく、文芸作品としての「何もの」かが保たれている。きわめて客観的に描写されているために、死の恐怖とか憂慮が前面に表出していないところが、冗長に流れることを堰き止めている。『仰臥漫録』に「生命の失われていく状態を」次のように綴っている。

……（略）……死に瀕して余も二十円を得たるを思えば『一年有半』や烟草屋を儲け出したる投書家はど手際には行かざりしも余にしては先づ上出来の方なり。しかしいづれも生命を売物にしたるは卑し

『仰臥漫録二』

「しかしいづれも生命を売物にしたるは卑し」と自嘲的にしるしているところは、子規独特の軽妙な表現だろう。子規の思ひは、生命の終焉を書き記すことが卑しいことではなく、生命を売り物することが卑しいことであると心情を吐露したのでらうと取るべきであろう。「生命の終焉の証人」として、微塵たりとも生命を手垢に染めるべきものではないという確信と取るべきではないだろうか。子規のこの表現をわたしは、「生命」の尊厳をしるしたものとして理解したい。生命の尊厳とは、感情で染めることなく「原寸大」に認めることであると解釈したい。

「生命の終焉」から逃れることができない状態であり、まさに尋常ではない「痛み」のなかで、「健康な精神」が保たれたことにある驚きを感じる。『仰臥漫録』がしるされた時期は、すでに体位変換すらままならない「死の

宣告」を受けていたことからすれば、悲嘆やあきらめがしるされても不思議ではないはずである。『仰臥漫録』は坦々と事実をしるすことに終始している。ここに子規が「健康な精神」を保持できた謎を解明する鍵があるように思う。

(2) 苦悩と内省

「生きる」価値や人間の価値を社会的な評価においた場合、社会的評価を喪失した場合に「生きる」目標や「生きる」こと自体の意味が失われることがある。「中途障害者」が人生の途中で、脳血管障害で倒れ、その後遺症で半身マヒとなり、職を失い、人間関係を失うという状態となった場合、その人が「何に」価値をおいて生きてきたか、ということが問題になる。社会的価値にのみ人生を「生きる」価値をおいていた場合は、「生きる」目標や「生きる」こと自体の意味を失うことになる。この場合は「あきらめ」という精神的自殺同然の状態となる。社会的な価値のみに焦点をあてて、失ったものを試算すれば、マイナスであることは自明のことである。この価値基準のなかで人生を概観すれば、解決のない破綻状態である。臨床の場面であった大半の男性「中途障害者」はいずれも「あきらめ」という破綻状況から逃げられないで逡巡していた。男性が圧倒的多数を占める理由としては、社会的な役割に生きることが義務づけられているからであろう。いいかえれば、社会の枠や社会的な役割が「自分らしさ」となっているからといえる。子規が死に行く床で、人間として生き続けることができた秘密は、感情を排し事実を受容したことによる。子規が「飾」を排し、事実を見つめ続けた作風と重なるようにも思える。

(3) 悲嘆と絶望

『仰臥漫録』の「十月十三日大雨恐ろしく降る午後晴」の記述に子規のただならない悲嘆と絶望の心境を垣間見ることができる。悲嘆と絶望のなかにある人間の姿と子規という人格をとおして、「悲嘆と絶望」体験の描写を読み取ることができる。

今日も飯はうまくない 昼飯も過ぎて午後二時頃天気は直りかける律は風呂に行くとして出てしまう 母は黙って枕元に坐って居られる 余は俄かに精神が変になって来た「さあたまらん」「どーしやうどーしやう」と苦しがつて少し煩悶を始める いよいよ例の如くなるか知らんと思ふと益々乱れ心地になりかけたら「たまらなたまらなどうしやうどうしやう」と連呼すると母は「しかたがない」静かな言葉 どうしてもたまらなので電話かけようと思ふて見ても電話かける処なし 遂に四方太にあてて電信を出す事にした 母は次の間から頼信紙を持って来られ硯箱もよせられた 直に「キテクレネギシ」と書いて渡すと……(略)……さなくとも時々起らうとする自殺熱はむらむらと起つて来た……(略)……よつぽと手で取ろうとしたがいやいやここだと思ふてじつと心の中は取らうと取るまいとの二つが戦つて居る 考えて居る内にしやりあげて泣き出した

『仰臥漫録』

自殺企図を克明に描写したところである。悲嘆と絶望が始まる転機は、「天氣の直りがけ」であつたようであ

る。子規の病状は小康というよりも悪化の一途であり、反対に外界が「晴れ」ていくことに反応したと考えられる。癒しのメカニズムは、「共感」「同伴」によって得られることから理解できることである。悲嘆と絶望が子規に押しよせ、混乱に陥るが、窮地から救い出したのが母のスタイルにあったことが理解できる。子規の悲嘆と絶望の訴えに対して、「しかたがない」の語りは「事実」と原寸大の状況描写であるといえる。電話や電信は救助信号であることは容易に理解できる。この時点で一応の決着と解釈できる。次に起きる小刀を取るか取らないかの「葛藤」は、こころの健康な働きをしている証しと取るべきであろう。最終の涙は癒しの涙と解釈したいところである。

子規にとって、闘病生活はまさに「命」と「からだ」が切り刻まれるような喪失体験であり、刻々と迫る終命を見つめるものであった。時として押し寄せる「悲嘆と絶望」に対して、死への挑戦として自殺で対抗することを企てている。自殺企図は混乱を打開できない状況のなかで、唯一のアクションとして想起されるが、解決の役割はなら果たさない。子規にとって喪失体験が受容できたとはいえない、まさに葛藤のなかの終命といわざるをえない。喪失体験と自殺の関係は、子規の場合と酷似している。ただ、違ふとすれば、子規は喪失の「事実」を嘘や夢とは考えずに、愚直に見つめようとしたことである。嘘であり夢であることを願うならば、夢を破るために破壊行為として自殺が行われるのではないかと思う。子規の場合に生き続ける意味は「なぞ」であるが、「精神の健康」は保持されていたといえるであろう。喪失ということから人間の生死をみた場合、意味や無意味をはるかに超越したところにあるように思う。われわれは「意味あること」を求め過ぎるあまり、事実を正確にとらえにくくなっているのではないだろうか。

参考文献

- 正岡子規『仰臥漫録』岩波書店、一九二七年
正岡子規『病床六尺』岩波書店、一九二七年
正岡子規『歌よみに与ふる書』岩波書店、一九五五年
土屋文明『子規歌集』岩波書店、一九五九年

おわりに

喪失の体験は、生命活動の停滞をきたすこともあり、「あきらめ」の心境に追いやることもある。さらに混迷をきわめた場合は、自殺企図に至らしめ、「精神の健康」が保持されていなければ、自殺という破局の転機に至ることもある。

しかし、喪失の体験によってはじめて、新境地に至った先輩もいたことは確かである。「すべてを失った」という表現のなかに、いままで固着していた価値観が、喪失体験によって精神の自由を得たということであろうか。さまざまな喪失があり、さまざまな体験となるのであるが、いかに「精神の健康」が保持された状態で、対処できるかということが、究極の課題であろう。

今後も喪失体験の記録や先輩たちの生きた姿を発掘していきたい。一連の作業を通してさまざまなことを知ることができた。出発したところは、きわめて私的な喪失体験であったが、歴史的な関心、社会状況、疾病などの、関心領域にまで広がった。研究の領域も社会事業史、臨床心理学、社会福祉学など、多岐にまたがるものとなった。一連の作業を通して、喪失の状況と基盤の研究はさらに深める必要性を痛感した。人物発掘に関しては、事

業史、生活史などの方法と技法が自己流ではあるが、模索できたように思う。先行した研究がきわめてすくないこともあり、自由奔放に作業をすすめることができた。学問的な精緻さに欠けるところがあり、叱責をまぬがれないところであると思う。

作業の延長線上で、喪失と「自分らしさ」があらたな関心事として、浮上してきた。喪失体験によって失われ、「自分らしさ」が保てないことである。内面、外面において「自分らしさ」が崩れる誘因となるのが、喪失である。「自分らしさ」を何で形成しているか、どのように育てられたかということも重要な要因であろう。今後の作業としては、「自分らしさ」の研究に焦点をあてたい。